

# 大阪府柏原市における 伝統的なブドウ産地の多様な取組み

石 原 肇<sup>†</sup>

Revitalization Efforts in the Traditional Grape Production Area  
of Kashiwara City, Osaka Prefecture

ISHIHARA Hajime

## 要 旨

本稿の目的は、大阪府の伝統的ブドウ産地である柏原市を研究対象地域として、農業の動態と近年取り組まれている取組みを把握することである。柏原市では、農家やJAによる生産や直売・観光農園がみられる。しかし、農家やJAによる従来からのこれら取組みだけでなく、ブドウ産地であることを地域資源として、行政によるブドウ狩りツアー、ワイナリーによる来訪者の町歩きへの誘導、商店街におけるブドウを前面に出した取組みなど、地域活性化につなげている。また、若い農業後継者がオーナー制ワイン園を開始しており、新たな展開もみられる。伝統的なブドウ産地である柏原市では、地域ぐるみで多様な取組みが実施されていることが明らかとなった。

## Abstract

The purpose of this paper is to grasp the dynamics of agriculture and the approaches towards local revitalization taken in recent years in Kashiwara City. This area is a traditional grape production center in Osaka prefecture. In Kashiwara City, there are many agricultural cooperatives, direct sales and tourism farms. However, farmers

---

<sup>†</sup>大阪産業大学 デザイン工学部 教授

草 稿 提 出 日 6月28日

最 終 原 稿 提 出 日 8月27日

and cooperatives have not limited themselves to only these efforts. A variety of new initiatives are being promoted that take advantage of Kashiwara's grape production in hope to springboard the revitalization of the region. Specifically, the city hosts grape picking tours to vineyards, while wineries are encouraging visitors to walk around the town, and in shopping districts restaurants offer deserts using local grapes. In addition, young agricultural entrepreneurs have started wine parks incorporating an "ownership sharing" system. These new developments in Kashiwara City, arise from the larger community working from traditional vineyard farming.

キーワード：伝統的ブドウ産地，多様な取組み，柏原市，大阪府

Keywords: grape production, regional revitalizations, Kashiwara City, Osaka prefecture

## 1 はじめに

現代における都市農地・農業の意義が評価され、2015年4月の「都市農業振興基本法」の制定以降、都市農業に係る種々の制度改正や創設がなされてきている。このような中、石原(2016)は、ほぼ全域が都市的地域である大阪府の農業について1990年から2015年までの変化を概観し、農業経営基盤の脆弱化、地域による主要作目の差異を確認し、農業関連事業等への取組みは直売を除くとそれほど多くはないという地域的特性を把握した上で、果樹や野菜といった園芸を振興しつつ、田の減少を抑えるための方策を講じることが急務であると指摘している。これらの大阪府の地域的特性をふまえ、野菜生産の盛んである地域に着目し、石原(2018a)は堺市における市民農園等の設置主体の多様化と立地の変化を明らかにしている。また、石原(2017)は、同様に野菜生産の盛んである八尾市における地域特産野菜を活用した地域活性化イベントの取組みが行われている背景を明らかにしている。さらに、稲作が中心である地域に着目し、石原(2018b)は東大阪市における農家の生産緑地の保有に係る意向調査を行い、その保全策の方向性を検討している。

他方、大阪府内の果樹生産についてみると、石原(2016)では、中河内地域の柏原市や南河内地域の羽曳野市等では、土地利用については樹園地が多く、売り上げ1位品目が果樹である農家が多く、農業関連事業では観光農園が多くみられることを把握しているに止まっている。ここで、柏原市に着目すると、柏原市産業振興課(2017a)によれば、「柏原ぶどうは一名「河内ぶどう」あるいは「堅下ぶどう」とも呼ばれ、栽培は古く今から280年前と言われ、1878(明治11)年頃に、大阪府が沢田村(現藤井寺市)に設けた指導園で育成した苗木を堅下村平野(現柏原市)の中野喜平氏が栽培に成功したのがきっかけになっ

て普及した。また、大正時代は、第1次世界大戦後に好景気が続きぶどうの需要が増大し、1921(大正10)年に出荷組合を設立して他府県へ貨車で出荷販売し、1928(昭和3)年～1935(昭和10)年には大阪府は全国で第1位のぶどう産地に発展したと。さらに、昭和30年代(1955～1964年)から台風や高度経済成長の影響をうけ、また他府県産ぶどうの入荷もあり農家の経営面積も縮小され、現在は、大阪中央市場や他府県に出荷販売し、また都市住民のため観光ぶどう狩りや、ぶどうの宅配便などで発展している。」としている。そこで、本稿では、大阪府の伝統的ブドウ産地である柏原市を研究対象地域として、農業の動態と近年の取組みについて把握することを目的とする。

## 2 本稿の位置付け

内山(2013)は、日本における主要果樹生産の展開を論じ、温州ミカンやリンゴなどと並び、ブドウについても言及している。それによれば、ブドウは江戸時代にすでに栽培され、明治期に別品種のブドウが日本に導入され、第2次世界大戦後に生産が拡大したが、1970年代後半以降に果樹園面積は減少したとし、ブドウ生産の核心地は山梨県中央部と長野県北部および東部であることを明らかにしている(内山2013)。

都市地域における果樹生産について、最も早い時期に論じたのは、安藤(1958)と思われる。安藤(1958)は、愛知県名古屋市のみ果樹生産農家を対象として、大都市という地域的特性と果樹という労働集約的作物の特性から、農家の専業化と兼業化の二極化が生じていることを指摘した。1990年以降についてみると、東京都稲城市におけるナシ農家の直売を対象として、宮地(2006)がその取組みを、林(2013)が経営特性に関する報告をしている。また、ブルーベリーに関しては、林(2015)が東京都小平市を中心に北多摩地域にみる栽培発展の経過を明らかにし、半澤ほか(2010)が東京都練馬区における観光農園の立地とその現状を報告している。なお、この他に、三大都市圏からはずれるが、林(2012a, 2012b)は岐阜市におけるブドウ狩りの現状と課題を報告している。このように、1990年以降の近畿圏の都市地域における果樹生産に関するものはみあたらない。

大阪府柏原市の果樹生産に関する研究をみると、中藤(1967)が柏原市堅下地区を対象地域としてブドウ産地の形成と都市化に伴う変貌を明らかにしている。また、高橋(1967)は近畿地方の複数の市場出荷型産地の一つとして、柏原市のブドウ生産も取り上げ、出荷組織が弱体化してきていることを指摘している。鈴木(1970)は、大阪市の近郊にある果樹作地域として柏原市のブドウ生産の変容を把握している。このように、1960年代後半から1970年にかけての研究はみられるものの、それ以降の柏原市のブドウ産地に着目した研究はみあたらない<sup>1)</sup>。

他方、内山他による日本の果樹栽培地域の分布パターンに関する一連の研究から大阪府河内地域についてのブドウ栽培密度に関する記述がみられる。山本・内山(1985)は、農業センサスを用いて日本を305の地域に区分し、主要な果樹の栽培密度の1960年から80年の動向を把握している。1960年のブドウの栽培密度は8区分され、大阪府河内地域は最も密度の高い区分から2番目であった。1970年と1980年でのそれは6区分され、大阪府河内地域は3番目の区分となっている。内山・亀井(1999)は1990年について、内山他(2004)は2000年について、上記と同様の分析を行っており、さらに密度の高さの区分順位は低下しているものの、栽培密度が引き続き高い地域であることが示されている。

このようなことから、本稿で大阪府の伝統的ブドウ産地である柏原市を研究対象地域として、農業の動態と近年の取組みを把握しておくことは、今後果樹栽培を地域振興の核としていく他の都市地域の参考となるものと考えられる。

### 3 研究対象地域および研究方法

#### (1) 研究対象地域

研究対象地域は、大阪府柏原市とする(図1)。柏原市の市域は25.33km<sup>2</sup>、人口71,112人(2015年10月1日現在、国勢調査)である。図1に示すとおり、柏原市は、大阪平野の南東部、大阪府と奈良県との府県境に位置しており、北側では八尾市、西側では藤井寺市、南側では羽曳野市、東側では奈良県と接している。柏原市産業振興課(2015)によれば、市域の3分の2を山が占め、中央部を大和川が流れており、大阪の都心からわずか20kmほどの距離にありながら、緑の山々と美しい渓谷、豊かな川の流れなど、多彩な自然環境を備えた、とても暮らしやすい市であるとしている。交通の面からみると柏原市は大阪市以南の南東部に位置しており、JR関西本線(大和路線)と近鉄大阪線、近鉄道明寺線の3本の鉄道が通っている。また、西名阪自動車道や外環状線、国道25号、国道165号線が市域を通っている。

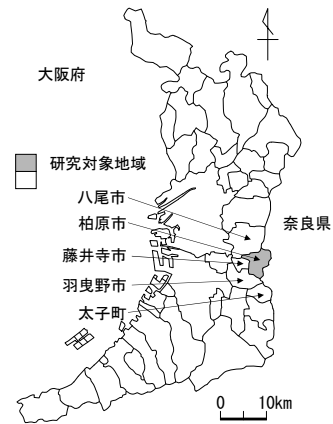


図1 研究対象地域

#### (2) 研究方法

研究方法は、以下のとおりである。まず、柏原市の農業が大阪府の中でどのような状況にあるかを1950年<sup>2)</sup>から2015年までの農業センサスにより農業経営基盤である経営耕地面



積と農家戸数から把握している<sup>3)</sup>。また、大阪府全域における柏原市のブドウ生産の位置付けをみるため、大阪府統計年鑑により1950年<sup>4)</sup>から2005年までのブドウの栽培面積と生産量を把握している。さらに、柏原市の農業生産の部門別の特徴を明らかにするため、大阪府統計年鑑により1965年から2005年までの農業粗生産額を、農業センサスにより1980年から2010年までの第1位の部門別農家数を把握している。くわえて、土地利用の変化を把握するため、各年代の25,000分の1地形図を入手し比較するとともに、柏原市が作成した地形図を入手し比較を行っている。

つぎに、柏原市におけるブドウの生産等に係る取組みについては、2018年5月に柏原市産業振興課・都市計画課、JA大阪中河内柏原営農購買所、カタシモワインフード(株)、農家への聞き取りを行った。また、2018年8月25日に開催された柏原市主催の「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」の実施状況を観察した。

## 4 柏原市の農業の変化

### (1) 農業経営基盤の変化

柏原市の農業経営基盤の特性をみるため、まず大阪府全域と比較して経営耕地面積の1950年から2015年までの推移を示したのが図2である。大阪府全域と柏原市とは、経営耕地面積全体の变化は似た減少の傾向を示している。経営耕地面積の内訳をみると、大阪

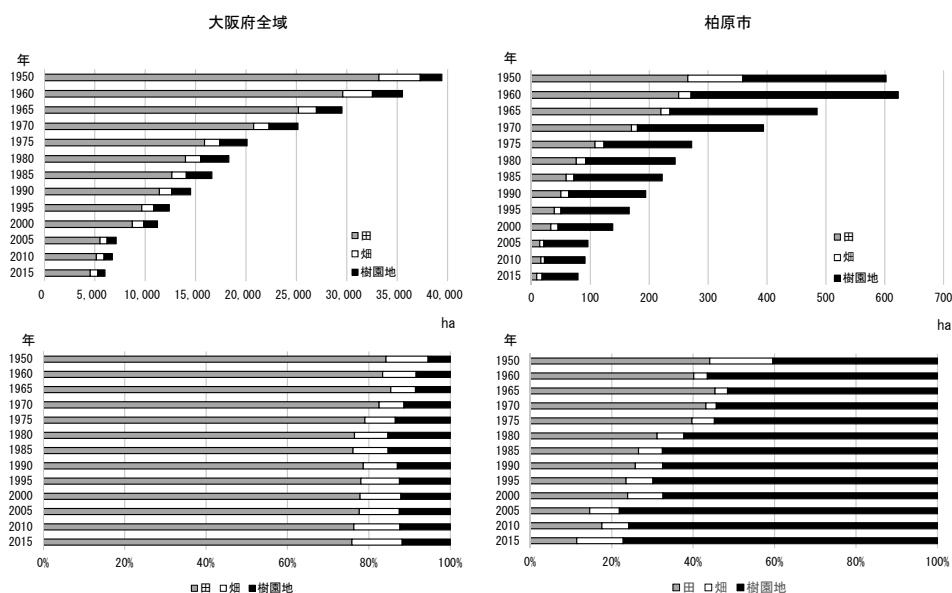


図2 経営耕地面積およびその割合の推移

資料：農業センサスにより作成

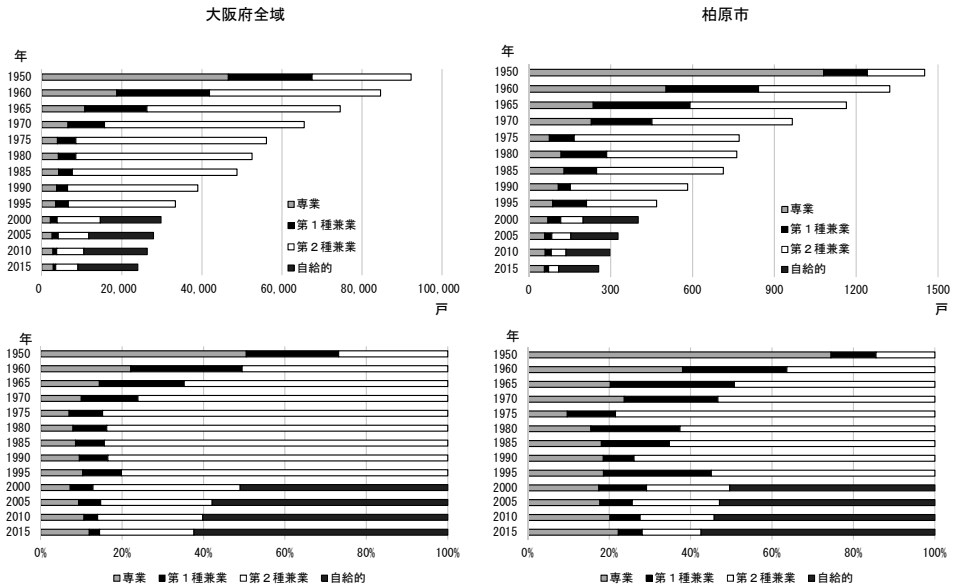


図3 農家戸数およびその割合の推移

資料：農業センサスにより作成

府全域はいずれの時期も水田が多くを占めている。これと比較して、柏原市の経営耕地面積の内訳をみると、いずれの時期も樹園地が最も多くを占め、樹園地の占める割合は増加してきている。

つぎに、同様に農業経営基盤である農家戸数の1950年から2015年までの推移を図3に示す。大阪府全域と柏原市とでは、農家戸数全体の変化は似た減少の傾向を示している。農家戸数の内訳をみると、近年、柏原市の専業農家が占める割合は大阪府全域のそれよりも大きい。

## (2) ブドウ生産の推移

大阪府全域における柏原市のブドウ生産の位置付けをみるため、1950年から2005年までのブドウの栽培面積を図4に、その生産量を図5に示す。大阪府全域のブドウの栽培面積は、1960年に約600haとピークに達しており、以降は減少傾向にある。柏原市のブドウの栽培面積も、1960年に約300haとピークに達しており、大阪府内全域の約半数を占めているが、その後は、大阪府と同様に減少傾向にあり、近年では大阪府内全域の約3分の1程度となっている。ブドウの生産量についてみると、栽培面積の推移と同様の傾向を示している。

柏原市の農業生産の部門別の特徴を明らかにするため、大阪府全域と比較して農業粗生

大阪府柏原市における伝統的なブドウ産地の多様な取組み (石原 肇)

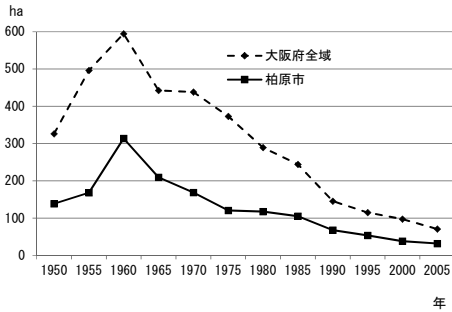


図4 ブドウ栽培面積の推移  
資料：大阪府統計年鑑により作成

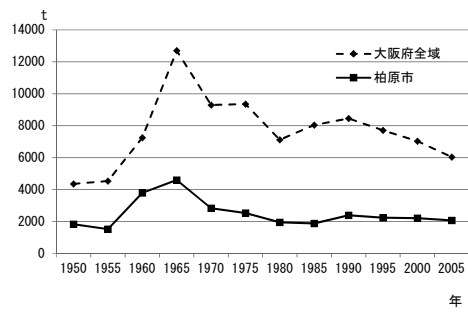


図5 ブドウ生産量の推移  
資料：大阪府統計年鑑により作成

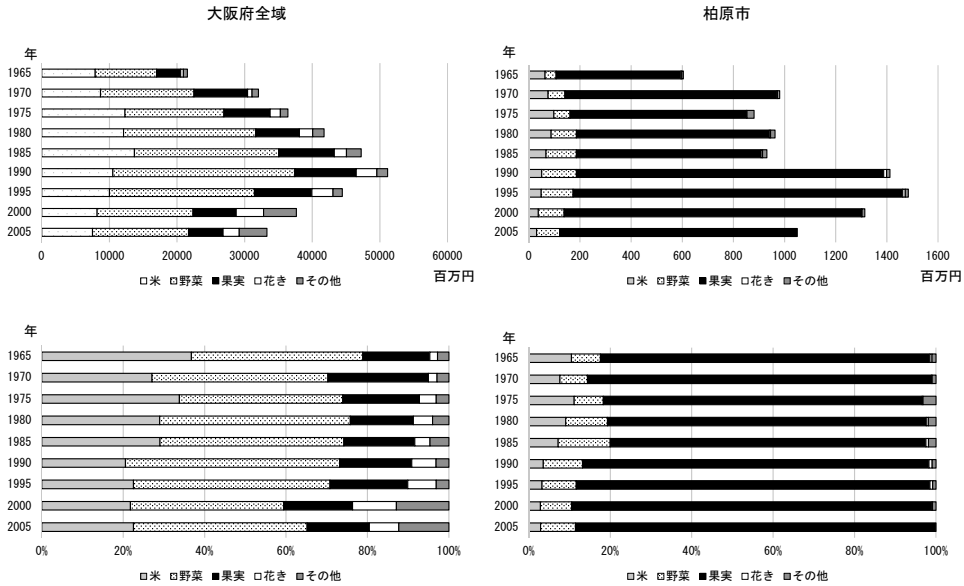


図6 農業粗生産額およびその割合の推移  
資料：大阪府統計年鑑により作成

産額の1965年から2005年までの推移を示したのが図6である。大阪府全域で見ると、1990年が農業粗生産額のピークとなっており、その内訳をみると一貫して野菜が最も大きく、ついで米となっている。これと比較して、柏原市は1995年が農業粗生産額のピークとなっており、その内訳をみると一貫して果樹がそのほとんどを占めている。

つぎに、第1位の部門別農家数の1980年から2010年までの推移を示した図7をみると、大阪府全域ではイネが最も多く、ついで野菜となっている。一方、柏原市は果樹類が圧倒的に多い状況が継続している。

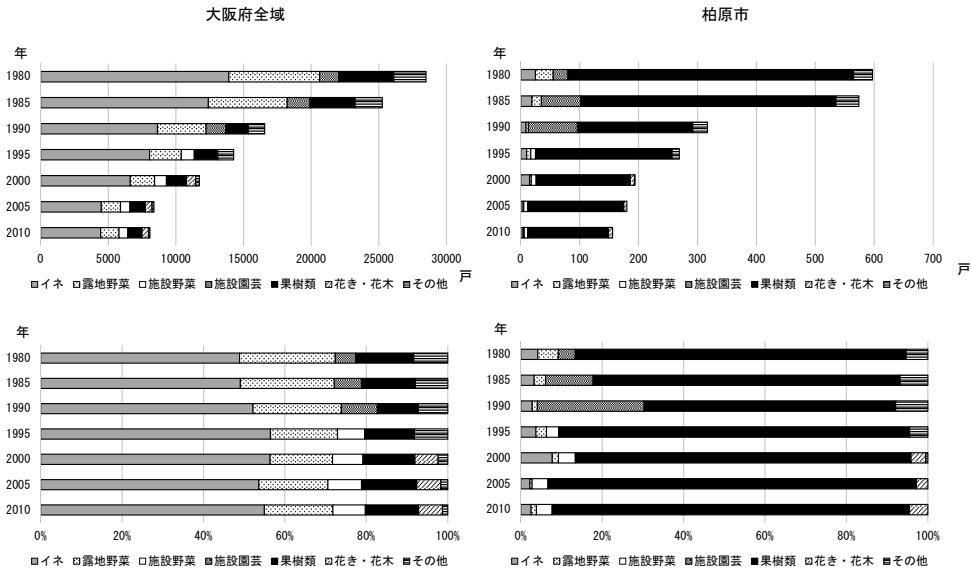


図7 第1位の部門別農家数およびその割合の推移  
資料：農業センサスにより作成



図8 1970年の柏原市堅下地区の土地利用の様子  
資料：25,000分の1地形図「信貴山」(1971年発行)および大和高田(1971年発行)を70%に縮小

土地利用の変化を把握するため、各年代の25,000分の1地形図を入手し、各年を比較すると(図8～図11)、1970年には平地部においても水田や樹園地がみられる。しかし、年を追うごとに、平地部での市街地化が進み、水田はほぼ消失し、樹園地がわずかに残っている程度である。他方、平地部以外をみると、樹園地はそのまま残っている場合が多い。

このように、都市化が進んだ柏原市では、平地部では市街化が進み、農地が大幅に減少し、市街地でのブドウ栽培は周囲が宅地に囲まれている場合が多いが(写真1)、平地部



図9 1993年の柏原市堅下地区の土地利用の様子

資料：25,000分の1地形図「信貴山」(1994年発行)および大和高田(1994年発行)を70%に縮小



図10 2006年の柏原市堅下地区の土地利用の様子

資料：25,000分の1地形図「信貴山」(2007年発行)を70%に縮小

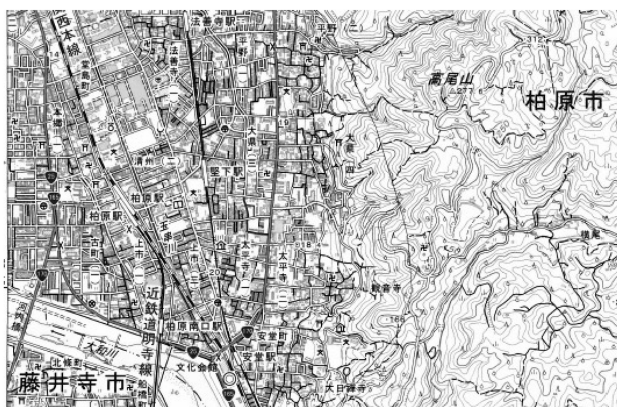


図11 2017年の柏原市堅下地区の土地利用の様子

資料：25,000分の1地形図「信貴山」(2018年発行)を70%に縮小





写真1 市街地のブドウ栽培  
資料：2018年4月14日，筆者撮影



写真2 山間部のブドウ栽培  
資料：2018年5月10日，筆者撮影

以外では山間部に樹園地が残り(写真2)，これを核としてブドウ生産が今でも継続して行われている。

## 5 柏原市におけるブドウ生産振興関係施策の実施状況

JA大阪中河内柏原営農購買所への聞き取りによれば，以下のとおりである。市場出荷は550t程度(10t/ha×55ha)と想定される。市場出荷は旧集落ごとに行われており，JAが関与しているのは1集落のみである。直売を行っている農家は30軒程度である。JAが案内している観光農園は横尾集落の農家が中心で，それが全てではない。市場出荷・直売・観光農園の全てを行っている農家は15軒に満たない程度と推測される。

このような状況の中で，どのような取組みが行われているか，以下に記す。

### (1) 直売所マップの作成

柏原市内では，ブドウの直売所がみられ，樹園地の多い山麓部のみならず(写真3)，市街地にもみられる(写真4)。柏原市は，市内農産物のPRをより効果的に行うため，2015年4月に柏原市とJA大阪中河内，大阪府中部農と緑の総合事務所を構成員とする「柏原市農業啓発推進協議会」を立ち上げている。大阪府中部農と緑の総合事務所(2015)によれば，同協議会は，すでに他市のマルシェ等に出展し，市内農産物のPR販売等を行っているが，市内にある直売所のPRを市内外へ広く行うために，「ぶどう直売所マップ(Web版)」を作成し，柏原市果樹振興会<sup>5)</sup>のHPで公開したと報告している。

2018年5月に柏原市果樹振興会のHPを閲覧した「ぶどう直売所マップ(Web版)」が図12である。このHPには，「ぶどう直売所マップ(Web版)」に掲載している直売所が21軒掲載されている。大阪府中部農と緑の総合事務所(2015)が報じた際の2015年7月7日現在では17軒とされており，掲載する直売所の数は増加しているものと考えられ，全体の7



大阪府柏原市における伝統的なぶどう産地の多様な取組み (石原 肇)



写真3 山麓部の直売所  
資料：2018年6月27日，筆者撮影



写真4 市街地の直売所  
資料：2018年6月27日，筆者撮影



図12 「ぶどう直売所マップ (Web版)」の作成  
資料：柏原市農業啓発推進協議会から引用

割程度が参画しているものと推測される。大阪府中部農と緑の総合事務所(2015)は、「柏原市は府内でもぶどうの直売が最も盛んな地域として知られており、生産農家によるぶどうの直売所は、柏原市内に30件以上あると推察されるが、ほとんどが農業者個人の経営によるもので、まとまった組織等もなく、これまで市内外へ十分なPRができていなかったことから、柏原市農業啓発推進協議会ができたことにより、協議会が個々の直売農業者に働きかけを行い、マップへの掲載の了承を得た直売所を写真入りで紹介することができた。」としている。

## (2) JAによる観光ぶどうセンターの運営

JA大阪中河内柏原営農購買所は、ブドウ狩りシーズンの8月上旬から10月上旬にかけて、「柏原市観光ぶどうセンター」となり(図13)、柏原市内でのブドウ狩りが円滑に行われるよう機能している。平坦部に残る樹園地はわずかであり、ブドウ狩りが行える樹園地は狭隘な道路で辿り着く山間部が多い。このため、来訪者を山間部のブドウ狩りが行える樹園地に的確に誘導する必要があり、JAがその役割を担っている。

ブドウ狩りが行える品種は、デラウェア(8月上旬から8月中旬)、ピオーネ(8月中旬から9月中旬)、マスカットオブ・ベリーA(8月中旬から10月中旬)、甲州(9月下旬から10月中旬)となっており、複数の品種を栽培することで、約2か月の期間が確保されている。デラウェアとそれ以外のピオーネ等では入園料に差が設けられている。

## (3) ブドウ狩りイベントの開催

柏原市では、2006年から「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」を毎年1回開催している(図14)。『柏原市まち・ひと・しごと創生総合戦略』(2016)の施策<sup>6)</sup>としても位置付けられ、農業者自らが企画経営するイベントの開催を支援し、地域農業の活性化を図るとしている。

柏原市産業振興課から聞き取った「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」への参加者数の推移を図15に示している。2006年以降、200～250人程度の参加者数で推移していた期間はあるものの、2015年から2017年にかけては400人以上の参加者で、年々増加しており、成果を上げているものと考えられる。2018年8月25日に開催された柏原市主催の「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」の実施状況を観察したところ、朝8時30分の開始から多くの参加者が詰めかけていることを確認した

園内食べ放題

【主な品種】  
 ・デラウェア (8月上旬～8月中旬)  
 ・ピオーネ (8月中旬～9月中旬)  
 ・マスカットオブ・ベリーA (8月中旬～10月中旬)  
 ・甲州 (9月下旬～10月中旬)

【期間】  
 8月10日から10月15日まで

入園料			
区分	大人	小人	幼児
一般	1,800円	800円	600円
団体(10人以上)	1,500円	700円	500円
小学生以下	1,200円	1,300円	900円

【お申し込み・お問い合わせ】  
 柏原市観光ぶどうセンター  
 大阪府柏原市太田 4丁目17-9  
 JA大阪中河内柏原営農購買所内  
 ☎072-971-8308 ☎072-971-4863

図13 「柏原ぶどう狩り」のチラシ  
 資料：JA大阪中河内のチラシを引用

2016 ふるさと  
 柏原ぶどう狩りツアー

8月27日(土) 横尾集出荷場  
※小雨決行

【参加費】  
 大人 1,100円  
 小学生 800円  
 幼児(3歳以上) 600円

かしらからバル  
 お酒類・バスケット・伊勢あげ・シウウマイ  
 豪華パスタ・伊勢あげ・インク・デザート・ジュース等  
 充実のメニューが恒例です!!  
 お土産ぶどうも大好評♪

楽しいイベントもいっぱい!!  
 ワインやビールもあるよ～♪  
 ・お楽しみ抽選会 ・かしらからバル(フードコート)  
 ・赤土産業販売ブース ・ぶどう皮とびし大会  
 ・体験コーナー 等々

最新情報をチェック!!  
 携帯電話の  
 QRコード  
 にアクセスください

主催：柏原市・ふるさと柏原ぶどう狩りツアー実行委員会  
(大阪府産業振興課協賛・和歌山県観光協会・和歌山県観光協会・和歌山県観光協会)  
 協力：和歌山県工業・大和府と観光と緑の地産多産局・大阪府北部農業共済組合・和歌山県果樹振興会・和歌山県果樹産出協議会

図14 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」のチラシ  
 資料：柏原市のチラシを引用

(写真5, 写真6)。ツアー参加者は個々のブドウ狩り園(写真7)でブドウ狩りを行った後、イベント会場(写真8)でのイベントを楽しめるようになっており、次節で記す柏原市内のワイナリーのワインも提供されており(写真9)、子供のみならず、大人も楽しめる工夫がなされている。

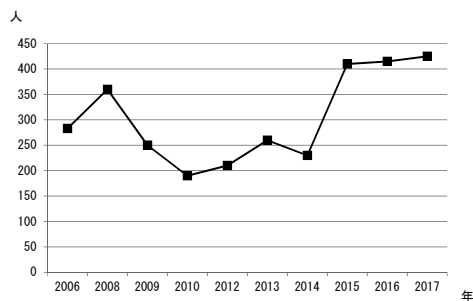


図15 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」の参加者の推移

資料：柏原市産業振興課からの聞き取りにより筆者作成



写真5 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」現地に向かうシャトルバス(柏原市役所前)

資料：2018年8月25日、筆者撮影



写真6 現地の受付に並ぶ「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」参加者

資料：2018年8月25日、筆者撮影



写真7 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」に参画しているブドウ狩り園

資料：2018年8月25日、筆者撮影



写真8 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」のイベント会場

資料：2018年8月25日、筆者撮影



写真9 「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」のイベント会で販売される地元産ワイン

資料：2018年8月25日、筆者撮影



#### (4) ワイン生産と「ワイナリーを拠点とした町歩き」とそのマップ

「大阪ミュージアム構想」のコンセプトのもと、大阪の歴史的・文化的資源等を活かし、「石畳と淡い街灯」など街の個性や魅力を引き出すまちづくりを支援し、人が集い・賑わい・交流する大阪を全国にアピールしていく事業として、「大阪府 石畳と淡い街灯まちづくり支援事業」が実施されている（柏原市産業振興課2017b）。柏原市の太平寺地区が選定されている（図16）。選定理由は、「小高い丘陵にある歴史的街並み、ぶどう畑の農風景、ワインやぶどうといった特産品をうまく取り込んだ提案で、地域の強みを活かして地域経済の活性化やコミュニティの再生等に取り組むプランとなっている。歴史的・文化的資源の質は高く、また良好な状態で維持されている。こうした、まだ知られていない大阪の資源を発掘しアピールしていく取り組みは、これから地域資源を活かしたまちづくりに取り組む団体等へのモデルとなる。」となっている（柏原市産業振興課2017b）。

柏原市内には現在1軒のワイナリーしかない。その唯一のワイナリーがカタシモワインフード（株）であり、この太平寺地区に立地している（写真10）。カタシモワインフード（株）の経営者は4代目であり、元々農家であったことから自社で約1haの農地を保有するとともに、近隣から約2haの農地を借り、合計約3haのブドウ栽培を行っている。ワイナリーは古民家を活用したもので、太平寺地区の街並みに合わせたものとなっている（写真11）。また、太平寺地区の街並みとワイナリーや近接するブドウ栽培地（写真12）を回遊できる



図16 石畳と淡い街灯まちづくり

資料：柏原市HPから引用



写真10 ワイナリーの製造部門

資料：2018年5月10日、筆者撮影



写真11 古民家を活用したワイナリー

資料：2018年5月10日、筆者撮影

よう、マップを作成している (図17)。

なお、この経営者は、大阪の食べ物と合ったワインの開発を志向しており、たこ焼きに合うシャンパンとして「たこシャン」を開発している。また、この経営者は、隣接する羽曳野市や八尾市のワイナリー7社と協議会を設立し、会長となり河内地域で生産される「河内ワイン」の普及にも努めている。



写真12 ワイナリーのブドウ栽培地

資料：2018年5月10日、筆者撮影

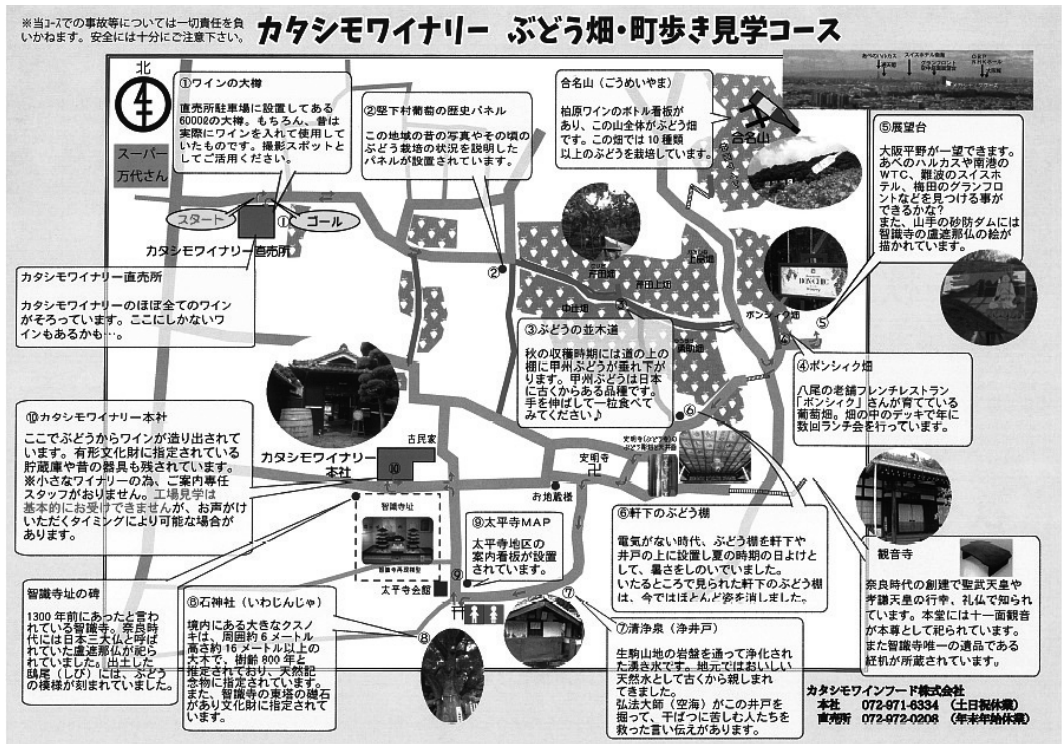


図17 ぶどう畑・町歩きマップ

資料：カタシモワインフード(株)から引用

### (5) 商店街等での取組み

柏原市は伝統的なブドウ産地であることから、商店街でもブドウのPRに向けた取組みがみられる。商店街では写真13のように、ブドウのイラストが随所にみられるようにしている。また、ブドウの収穫期限定であるが、飲食店でブドウを使ったスイーツ等が提供されている (図18)。



写真13 商店街での取組み  
資料：2018年4月14日，筆者撮影

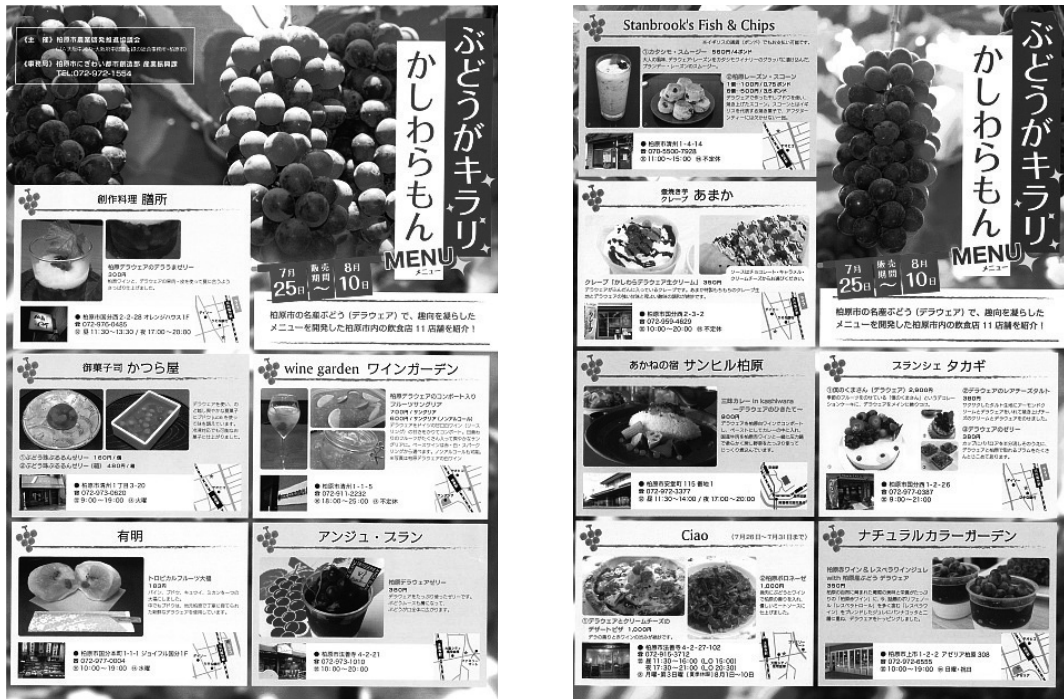


図18 ブドウを使ったスイーツ  
資料：柏原市農業啓発推進協議会から引用

(6) 若手農業後継者によるオーナー制ワイン園プロジェクトの取組み

2017年から農業後継者である奥野成樹氏がオーナー制ワイン園プロジェクトを開始している。奥野氏のHPに提示されているオーナー制ワイン園プロジェクトの仕組みを転載する(図19)。これは、棚田オーナー制度のブドウ版と考えられ、オーナーに提供されるものが米ではなくワインであること、米のように年内で完結せず、ワインができるまで複数



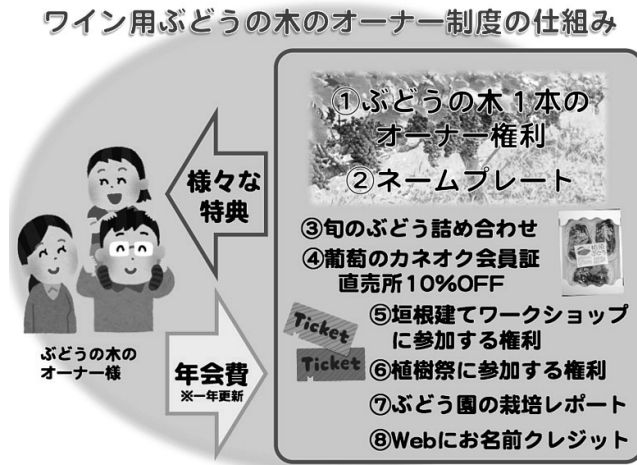


図19 オーナー制ワイン園プロジェクト

資料：奥野成樹 (2017) HPから引用

年を要すること等が異なる。2017年には、想定していたオーナー数に達したとのことであり、順調にプロジェクトは動き出している。今後も、円滑にプロジェクトが進んでいくか注視していく必要がある。

## 6 まとめと今後の課題

伝統的なブドウ産地である大阪府柏原市では、農家やJAによる生産や直売・観光農園がみられる。しかし、農家やJAによる従来からの取組みだけでなく、ブドウ産地であることを地域資源として、行政によるブドウ狩りツアー、ワイナリーによる来訪者の町歩きへの誘導、商店街におけるブドウを前面に出した取組みなど、地域活性化につなげている。また、若い農業後継者がオーナー制ワイン園を開始しており、新たな展開もみられる。柏原市の伝統的なブドウ産地では、地域ぐるみで多様な取組みが実施されている。

今後、ブドウ生産が盛んな隣接する羽曳野市や太子町についてもブドウ産地としてどのような地域にブドウ栽培地が位置しているか、どのような取組みが実施されていくかなどを把握していく必要がある。また、羽曳野市や太子町の各市町での取組みだけでなく、柏原市を含めた近接する複数の市町での連携した取組みについても把握することが必要である。

## 付記

本稿は、立正地理学会2018年度(第73回)研究発表大会(2018年6月、立正大学)で口頭

発表した内容に修正・加筆したものである。本研究の一部は学内研究費の助成を受けたものである。本研究の調査を進めるにあたり、柏原市都市計画課・産業振興課、JA大阪中河内柏原営農購買所、カタシモワインフード(株)、農家の方々にご協力いただいた。ここに記して謝意を表す。

## 注

- 1) ジャーナリストの視点から高取(2017)による柏原市のワイナリーの取組みの報告がみられる。また、隣接する羽曳野市に関しては、同様にジャーナリストの視点から古谷によるイチジクのジャム生産による地域おこし(古谷2010)やブドウ園の担い手育成(古谷2014)の報告がみられる。
- 2) 1956年(昭和31年)9月30日に、中河内郡柏原町と南河内郡国分町が合併し、新たに中河内郡柏原町となっていることから、1950年は、柏原町のデータと国分町のデータを合算したものである。なお、その後、1958年(昭和33年)10月1日に、中河内郡柏原町が、柏原市となり、市制が施行されている。
- 3) 世界農林業センサスは1950年から10年ごとに調査が実施されており、この中間年に農業センサスの調査が実施されているが、1955年は臨時農業基本調査が実施された。この臨時農業基本調査は予算の関係で収集データが少なかったり、臨時農業基本調査市町村別統計表を確認したところ、経営耕地面積では田と畑の記載だけで樹園地の記載がなかったりすることから、本稿では1955年は除外している。
- 4) 1950年と1955年については注2)と同様に、柏原町のデータと国分町のデータを合算したものである。
- 5) 柏原市産業振興課に確認したところ、柏原市果樹振興会は任意団体であるとのことであった。また、同様に、JA大阪中河内柏原営農購買所に確認したところ、柏原市果樹振興会は市場出荷のための生産組織とも異なるとのことであった。
- 6) 『柏原市まち・ひと・しごと創生総合戦略』(2016)では、就農希望者が柏原市において新たな生産者となるよう、栽培技術の習得など、担い手の育成を行うとして、「ぶどう担い手塾」の開講もしている。

## 参考文献

- 安藤万寿男「大都市近郊における果樹作」『地理学評論』第31巻第9号、1958年9月、536-547ページ。
- 石原 肇「1990年以降の大阪府の都市における農業の変化－都市農業振興基本法の制定を

ふまえてー」『日本都市学会年報』第50巻, 2016年5月, 307-314ページ。

石原 肇「大阪府の「八尾バル」における地域特産野菜を用いた地産地消の取組み」『地域研究』第58巻A, 2017年12月, 28-40ページ。

石原 肇「堺市における市民農園等の設置主体の多様化と立地の変化」『日本都市学会年報』第52巻, 2018年5月, 81-90ページ。

石原 肇「生産緑地2022年問題に係る東大阪市における課題と対応策」『大阪産業大学論集 人文・社会科学編』第34号, 2018年10月, 71-90ページ。

内山幸久「日本における主要果樹生産の展開」『地理空間』第6巻第2号, 2013年12月, 83-94ページ。

内山幸久・亀井啓一郎「1990年におけるわが国の果樹栽培地域の分布パターン」『地球環境研究』第1巻, 1999年3月, 69-80ページ。

内山幸久・山下太一・高橋 純「2000年におけるわが国の果樹栽培地域の分布パターン」『地球環境研究』第6巻, 2004年3月, 85-96ページ。

大阪府中部農と緑の総合事務所「柏原市ぶどう直売所マップ (Web版) が完成! 「柏原市農業啓発推進協議会」, 2015年7月。

([http://www.pref.osaka.lg.jp/chubunm/chubu\\_nm/fq-katudou27-1.html](http://www.pref.osaka.lg.jp/chubunm/chubu_nm/fq-katudou27-1.html): 最終閲覧2018年5月5日)

奥野成樹「耕作放棄地開拓のお手伝いから始める, オーナー制ワイン園プロジェクト」, 2017年。

(<https://faavo.jp/osaka/project/2013>: 最終閲覧2018年6月27日)

柏原市『柏原市まち・ひと・しごと創生総合戦略』, 2016年2月。

柏原市産業振興課「柏原市の見どころ」, 2015年4月。

(<http://www.city.kashiwara.osaka.jp/docs/2014012900324/>: 最終閲覧2018年5月5日)

柏原市産業振興課「柏原ぶどう 豆知識」, 2017年3月。

(<http://www.city.kashiwara.osaka.jp/docs/2014060200131/>: 最終閲覧2018年5月5日)

柏原市産業振興課「石畳と淡い街灯まちづくり【太平寺地区～歴史のロマンとぶどうの香るまち～】」, 2017年9月。

(<http://www.city.kashiwara.osaka.jp/docs/2017092500026/>: 最終閲覧2018年5月5日)

鈴木文子「大阪市近郊果樹作地域の変容」『地理学報告 (愛知教育大学地理学会)』第35号, 1970年11月, 28-34ページ。

高取佐智代「株式会社毎日新聞社 第65回 全国農業コンクール優秀事例から 地域資源を活かしたつながりで経営革新: ぶどう産地を守り, 地域とともに実践してきたこと「カタ

- シモワインフード(株) (大阪府柏原市) 代表取締役 高井利洋さん 『農業と経済』 第83巻第6号, 2017年6月, 73-76ページ。
- 高橋佳代子 「主業的果樹栽培地域の出荷組織の体系化」 『地理学報(大阪教育大学地理学教室)』 第11号, 1967年11月, 18-25ページ。
- 中藤康俊 「大阪府におけるブドウ生産地の形成と変貌－柏原市堅下地区を中心として－」 『岡山史学』 第19号, 1967年10月, 32-54ページ。
- 林 琢也 「果樹でグリーン・ツーリズムを進める (No.47) 岐阜市長良地区雄総におけるブドウ狩りの現状と課題 (1)」 『果実日本』 第67巻第6号, 2012年6月, 85-89ページ。
- 林 琢也 「果樹でグリーン・ツーリズムを進める (No.48) 岐阜市長良地区雄総におけるブドウ狩りの現状と課題 (2)」 『果実日本』 第67巻第7号, 2012年7月, 103-106ページ。
- 林 琢也 「東京都稲城市における農家直売所の経営特性」 『地域生活学研究』 第4巻, 2013年3月, 25-36ページ。
- 林 琢也 「北多摩地域にみるブルーベリー栽培発展の諸相－小平市を中心に－」 『地理』 第60巻第7号, 2015年7月, 34-41ページ。
- 半澤早苗・杉浦芳夫・原山道子 「東京都練馬区におけるブルーベリー観光農園の立地とその現状」 『観光科学研究』 第3巻, 2010年3月, 155-168ページ。
- 古谷千絵 「農の現場レポート いちじくジャムで地域振興－大阪府羽曳野市の場合－」 『農業協同組合経営実務』 第65巻第7号, 2010年7月, 52-56ページ。
- 古谷千絵 「農業・農村の現場から 都市近郊農業:消えゆくブドウ園と集う都市住民－「大阪ブドウ」産地 大阪府・南河内地域の現状と課題－」 『農業』 第1589号, 2010年7月, 54-59ページ。
- 宮地忠幸 「改正生産緑地法下の都市農業の動態－東京都を事例として－」 『地理学報告(愛知教育大学地理学会)』 第103巻, 2006年3月, 1-16ページ。
- 宮地忠幸 「多摩川梨産地のいま－稲城の梨は「幻の梨」－」 『地理』 第58巻第10号, 2013年10月, 60-68ページ。
- 山本正三・内山幸久 「1960-80年におけるわが国の果樹栽培地域の動向」 『筑波大学人文地理学研究』 第9巻, 1985年3月, 21-48ページ。